西南学院大学　国際文化論集　第36巻　第２号　1－25頁　2022年３月

日本キリスト教史研究の方法論をめぐって[1)]

塩　野　和　夫

はじめに（資料①「聖書との出会い ― 苦悩の道を辿る」）

私たちが歴史を研究するとはどういうことでしょうか。

1971年４月に同志社大学経済学部に入学した私は，1973年９月から深田未來生教授（神学部）の勧めにより貧しく差別を受けている地域における学童保育のボランティア活動を始めました。地域には当時スラムが広がっており，子どもたちが抱えている問題が私にとって大きな課題となりました。そこで，1975年１月に地域へ転居し，４月には神学部３年生への編入学を許可されました。一連の行動は地域の子どもたちが人間としてふさわしく生きるためには何が必要なのかを考えるためでした。

ところが間もなく，それは６月のことでした。「過労と寒さ」から来る腎臓病を患い，大学の医師から「下宿に留まるならば，絶対安静にしているように!!」と指示されたのです。病気のため大学へ行くこともできない。待っている子どもたちと会うこともできない。蒲団に横たわり悶々と天上ばかり見あげている日々に神を疑いはしませんでした。しかし，神が何を考えているのか分からなかったのです。

そんな日常生活を繰り返し，８月に入った頃でした。不思議な経験をしたのです。その時の経験を記した文章です[2)]。

---

1) 本稿は 2021 年 8 月 17 日（火）に同志社大学神学研究科の M ゼミの夏合宿で行った講演を論文としてまとめたものである。講演の雰囲気を伝えるために話し言葉としている。

2) 「聖書との出会い ― 苦悩の道を辿る」塩野和夫『キリストにある真実を求めて』44 頁

失意と病床の中にあって，不思議と心が安らぐのを感じた。詩篇を口にした時，ありのままの自分に落ちついていたからである。

あの安らぎとは何だったのか。後にそう問わざるをえなくなっていた。そして，それは詩篇第42－43篇に秘められた真実への追体験から来ていると直感した。そうであるならば，詩篇に秘められた真実とは何なのか。本稿は詩篇第42－43篇の真実探求を目的とする。

あの時の経験を別の所ではこのように記しています[3)]。

私たちは歴史を認識し，歴史を生きた人々の精神的経験を追体験できる。それは人間が歴史性を刻印された歴史的存在であり，そのような者として共感性を媒介として歴史を追体験しつつ認識できるからである。

したがって，自らの経験に基づいた認識によれば歴史を研究するのは私たちが歴史性を刻印された存在であるからであり，人間は追体験しつつ深く歴史を学ぶことができるのです。

1　教会史の執筆 ― 歴史研究の原体験 ―

（資料②『伊予吉田教会90年史』，資料③『宇和島信愛教会百年史』）

(1) 執筆までの経緯

1979年４月に日本基督教団大津教会に赴任しました。教会では毎週月曜日から金曜日までの早天祈祷会で祈りを教えられ，訪問伝道委員会で訪問活動を訓練されました。参考までに早天祈祷会は毎朝６時から７時まであり，６時から６時半までが説教で，６時半から７時までが祈りの時でした。また，月・火・木・金の半日は委員の方に案内されて訪問活動に従事していました。

---

3) 塩野和夫『継承されるキリスト教教育』104 頁

それらは1981年４月に赴任した宇和島信愛教会と伊予吉田教会における伝道牧会活動の基本となりました。その上赴任して数年後に両教会の教会史編纂作業が開始されました。以下は，いずれも『伊予吉田教会90年史』の「あとがき」からの引用です。

(2) ４年の歳月[4)]

こつこつと作業を進め，『伊予吉田教会90年史』の完成を見るのにまる４年の歳月を要しました。大雑把にいって，４年の歳月は３期に区分できます。

1984年４月から教会保存資料の調査にあたったのが第１期です。第１期には１年かけて教会保存資料を分類し，内容を調査し，資料として整理しました。

第２期には「伊予吉田教会90年史概説」を作成しました。「概説」を作成したのは1985年４月から８月にかけてです。上段に教会史概説を記し，下段に各時代の調査事項を添えてみました。

第３期に区分される教会外部への調査と並行して，教会史執筆にあたったのが1985年９月からでした。他教会や教会関係者を訪問した際に，前もって作成していた「概説」が役立ちました。人間の記憶は人や出来事についてはかなり正確であっても，しばしば年月が入り混じり逆転していました。こうして，ようやく第１稿を脱稿したのが1986年12月末でした。その後，さらに２度校正してついに『伊予吉田教会90年史』の完成を見たのでした。

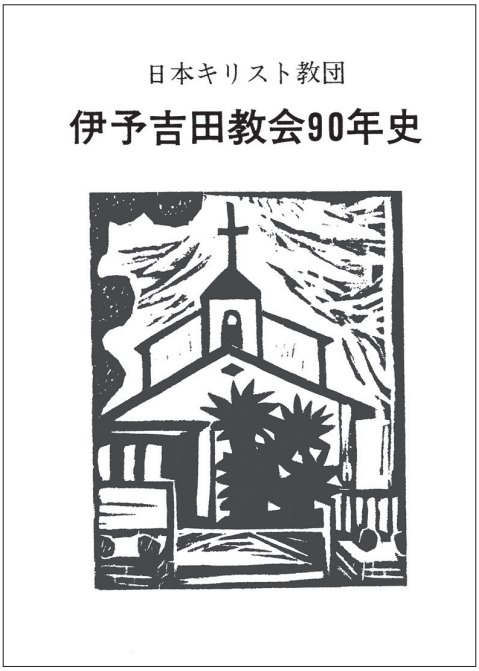
(3) 一貫した目的

『伊予吉田教会90年史』は一貫して「教会の歴史に即すること」を目的として執筆されました。

各時代を教会は生きていました。生きて，信仰を受け取り，引き継いでいきました。「教会の歴史に即すること」とは生きた教会の歴史を受け止め表現することです。

---

4) 「(2) 4 年の歳月」,「(3) 一貫した目的」,「(4) すばらしかったこと」はいずれも『伊予吉田教会 90 年史』「あとがき」からの引用である。ただし,「あとがき」には頁が記載されていないため，引用である事実だけ指摘しておく。



『伊予吉田教会90年史』

教会を生み，立て，活動してきた根本動機に共鳴しながら，共鳴する心で表現することです。

(4) すばらしかったこと

『伊予吉田教会90年史』作成で素晴らしかったことは，会員の総力を結集できたことです。

教会保存資料の調査に始まって，資料の整理・関係者を訪ねて歩いたこと・草稿の製本と送付など，会員の協力によってできたことでした。

その他に，資料や写真などを提供下さった方々がありました。

２　歴史史料の分析と整理・考察

(1) 土肥昭夫教授の指導（資料④「日本キリスト教史の方法論」）

1989年３月に宇和島信愛教会・伊予吉田教会を辞任すると，同志社大学神学部の土肥昭夫先生（1928～2008）の研究室を真っ先に訪ねました。実は，『伊予吉田教会90年史』『宇和島信愛教会百年史』の執筆についても先生の指導を受けていました。それにしばらく日本キリスト教史の研究に打ち込みたいと願っていました。それで土肥先生を訪ねたのです。

その時，先生から２つのアドバイスを受けました。「大林浩先生からトレルチを学びなさい」と「人文科学研究所に吉田亮先生を訪ね，キリスト教社会問題研究会に加わりなさい」という２つです。１年後の1990年４月に同志社大学神学研究科後期課程への入学を許可され，土肥ゼミに加わります。その時に３つ目のアドバイスを受けました。「キリスト教史学会に入りなさい。ええか，学会というのは発表するために入るのやで！」です。

土肥先生がトレルチを初めとして歴史研究の方法論を検討しておられたことは間違いありません。先生から直接「今でもトレルチを学んでいる」と聞いていました。しかし，日頃の先生は多くの資料を前にひたすらに分析整理し，研究発表をしておられました。そんな先生の姿勢から博士論文は多大な影響を受けています。

(2) 日本組合基督教会史の研究史

（資料⑤「第１部　日本組合基督教会史の研究史」）

博士論文である『日本組合基督教会史研究序説』は「第１部」に「日本組合基督教会史の研究史」を置いています。

「第１部」の中心は「第２章　湯浅与三『基督にある自由を求めて』の研究」です。湯浅は『基督にある自由を求めて』を書き上げると，収集した資料をすべて同志社に寄付しました。それらはすべて人文科学研究所に保存されていました。なお，「資料⑥　湯浅与三史料－日本組合基督教会史資料」がその

一覧です。それらすべてに目を通し，整理分類して「第２章」を執筆しました。

その上で研究史の時期区分を行い，「第１章」で組合教会の教会史編纂事業を取りあげ今泉真幸と小崎弘道を考察しました。「第３章」では魚木忠一・溝口靖夫・三井久と棟方文雄を検討対象としました。「第４章」では土肥昭夫・杉井六郎と竹中正夫，それにアメリカンボードの日本伝道と組合教会の海外伝道を扱いました。

(3) 教会法と統計資料の研究

（資料⑦「第３部　日本組合基督教会教会法の研究」，
資料⑧「第４部　日本組合基督教会統計の研究」）

組合教会の全体像を分析するために行った一つが教会法研究です。

そもそも組合教会にとって教会法とは何なのでしょうか。調査してみると，教会法は時期ごとに変化していることが分かりました。すなわち，教会の置かれている状況が教会法に反映しているし，教会法は各時期の組合教会を規定していました。そこで変化する時期に注目して教会法の研究に取り組みました。

教会法の変化から組合教会史を時期を区分できました。下記の通りです。

第１期　1886～1909年
第２期　1910～1918年
第３期　1919～1935年
第４期　1936～1941年

教会法と並んで組合教会の全体像を把握するために取り組んだのが統計資料の研究です。具体的には教会数，会員数と教師数，それに財産総額と教会常費についてそれぞれの推移を分析しました。

すると興味深い結果が出てきました。統計資料の推移も教会法の変化と対応していたのです。

(4) 時期区分をめぐって

（資料⑨「結章　日本組合基督教会史の時期区分」,
資料⑩「日本組合基督の歴史的四類型」）

組合教会の教会法と統計資料の研究を重ねることによって明快な時期区分ができました。

博士論文の結論はこの時期区分にあります。それは膨大な史料を綿密に分析した結果でもありました。「しかし，何かが足りない。時期を区分するだけでは教会法の研究も統計資料の研究も生きてこない。それらを生かす何かがあるはずだが，その何かが分からない」。これがその時の正直な気持ちでした。「したがって，時期区分で終わる博士論文は未完成の作品と言わざるをえない」と考えました。

併せて，タイトルを『日本組合基督教会史研究序説』とした理由があります。それは組合教会史を研究する者にとって，あるいは日本のキリスト教史を研究する者にとって，本書は基礎的研究となります。そこで本書の研究を踏まえてさらに展開してほしいという希望です。

博士論文を執筆した時には解けなかった課題が間もなく克服できたのです。課題は「組合教会史の各時期にはそれぞれの時期に対応した個性ある教会活動や教会員の信仰生活があって，それらが各時期の推移に伴って変化していたという歴史的事実」[5]として認識されていました。

その認識に対して歴史的類型という概念を用いて「それぞれの時期」と「個性ある教会活動や教会員の信仰生活」を結びつけることによって，本来歴史研究の中核に位置づけられるべき歴史を担った個体を生きいきと描くことができたのです。次の通りです。

第１期（1886～1903）に活躍したのは伝道への情熱に生きた信仰者です。彼らは経済的に不十分な状況にあっても伝道活動に従事しました。

---

5) 参照,「はじめに」塩野和夫『日本組合基督教会史研究序説』ⅰ～ⅵ頁。

第２期（1904～1918）は教会の自給独立に取り組んだ信仰者です。この時期に多くの会堂が建設され，教会の活動費も充実します。組合教会で見ると，教会の組織化を進め，東アジア地域への伝道活動を始めています。

第３期（1919～1935）に入ると，教会の社会的関心が高まり，地域社会において様々な幅広い活動に取り組んでいます。

第４期（1936～1941）に組合教会は個別教会への管理統制を強め，教会も自らの維持に努めています。

それにしてもなぜ，綿密な史料分析の結果による時期区分だけで納得できなかったのでしょうか。そこにトレルチを初めとした歴史研究の方法論に対する認識があったのです。

３　歴史を生かす方法論

(1) 大林浩先生とトレルチ（資料⑪大林浩『トレルチと現代神学』）

1989年４月から２年間，ラトガース大学教授でその頃同志社大学で客員教授をしておられた大林浩先生（1934～）からトレルチを学びました。それにしてもなぜ大林先生はトレルチに関心を持たれたのか。大林先生から直接伺った話によると，アメリカへ留学するに際して「トレルチを学んできなさい」とアドバイスされたのは，「土居真俊先生（1907～1988）である」。土居先生は「トレルチは今，注目されていない。しかし，必ず評価される日が来る。だから，トレルチを学んできなさい」と助言されました。

大林先生からトレルチについて多くを学びましたが，印象に残っている２つがあります。一つはトレルチの学問的業績に対する評価に関してです。トレルチの学問的業績は歴史的方法を確立した初期，『キリスト教会の社会教説』に代表される中期，『歴史主義とその諸問題』を完成させた後期に区分できます。そのうえで，大林先生によると中期の『キリスト教会の社会教説』を評価する立場と後期の『歴史主義とその諸問題』を評価する立場があり，先生は後者で

した。だから，中期の業績は後期の業績に対して「予備的な位置を占める」とされました。

もう一つ強く影響を受けたのは『歴史主義とその諸問題』において展開されている２つの概念「総体概念」と「個体性概念」をめぐってです。対象の全体像を捉えるためには総体概念が必要であるが，歴史は生きている。生きている歴史をどうすればそのように表現できるのか。そこで課題になるのが個体性概念である。大林先生によると「人間が生きているように，歴史も生きている」。そこで総体概念の中に位置づけながら個体性概念を生きいきと描くことによって歴史は生きた歴史として復元されるのです[6]。

(2) トレルチの歴史的方法

（資料⑫「基本的方法としての歴史的思惟－エルンスト・トレルチの歴史的思惟を手掛かりとして」，資料⑬「歴史的認識と共同体概念－エルンスト・トレルチの共同体諸概念を手掛かりとして」）

トレルチの歴史的方法をめぐって，２つの観点から考察しています。一つは歴史的思惟への着目であり，彼の生涯にわたる研究を３期に区分しました。

トレルチが歴史的方法を確立した初期については，「トレルチ初期の歴史的思惟－歴史的思惟とリチュル的なもの」として分析しました。『キリスト教会の社会教説』に代表される中期は，「トレルチ中期の歴史的思惟－歴史的思惟とキリスト教史」としました。さらに，『歴史主義とその諸問題』に代表される後期は「トレルチ後期の歴史的思惟－歴史的思惟と激動する時代」として考察しました。

ところで，初期と中期においてトレルチが強く影響を受けたマックス・ウエーバーはキリスト教を教会概念と分派概念に分けて分析しました。それに対して，トレルチはさらに神秘主義を加えました。近現代キリスト教の研究にお

6) 「総体概念」と「個体性概念」については，第 2 部第 1 章第 3 節「トレルチ後期の歴史的思惟－歴史的思惟と激動する時代」（塩野和夫，前掲書，135～143 頁）で分析している。ところが，そこでは「個体性概念」とするべきところを「個性概念」と誤訳している。

いて神秘主義は重要な概念となっています。なお，歴史的思惟によるトレルチ研究には大林浩先生の影響が強く残っています。

それに対して共同体概念を手掛かりとした研究には独自性が認められます。そこでもう一つの観点である共同体概念に注目した研究では，『キリスト教会の社会教説』の「序論」，第３章の「第１節　プロテスタンティズムの社会学的問題」と「第４節(3)　神秘主義とスピリチュアリスムスの社会教説」および「結び」を対象として，そこから教会を表現しているすべての共同体概念を抽出し分析しました。その結果，トレルチは２系列の共同体概念を使っていることが分かります。

第１系列に属していた概念はキリスト教共同体だけを表現した概念であり，教会（Kirche）と分派（Sekte）です。第１系列の概念を用いる場合，トレルチはキリスト教共同体内部に自らの思惟を持ち込み，キリスト教史の把握と分析，叙述に務める傾向が認められます。

それに対して第２系列に属していた概念は社会の共同体概念として用いられていたものを他の共同体と共にキリスト教共同体を表現するために用いています。集団（Gruppe），共同体（Gemeinshaft），会衆（Gemeinde）がそれです。第２系列の概念を用いる場合，トレルチの思惟はキリスト教共同体との関わりを保ちながらもその外部にあって，キリスト教史を他の社会的な共同体との関わりの中に位置づけようとしています。

したがって，トレルチのキリスト教研究はキリスト教会だけではなく他の社会的団体との関わりも対象としています。

(3) ニーバーのアメリカ教会史研究

（資料⑭「教派史研究の課題 ― ヘルムート・リチャード・ニーバーの教派史研究を手掛かりとして」，⑮竹中正夫『美と真実 ― 近代日本の美術とキリスト教』）

トレルチに学びながらアメリカの教派史研究に新たな可能性を拓いたのがニーバーです。

ニーバーは著書『教派主義の社会的源泉』の導入にあたる「第１章　分裂した教会の倫理的失敗」で教派の基本的特質を社会学的側面から明らかにしています。次いで,「第２章」・「第３章」・「第４章」・「第５章」でニーバーは経済的側面とナショナリズムの視点から合衆国に導入された分裂したプロテスタント・キリスト教の分析を行います。さらに,「第６章」・「第７章」・「第８章」・「第９章」では合衆国における分裂を地域主義・移民・人種問題から分析しています。そして「第10章」でニーバーは教派分裂をキリスト教の敗北の歴史であると結論し，その克服として文化総合の概念を提示しています。要するに，ニーバーの『教派主義の社会的源泉』は合衆国に多くの教派が存在し，活動しているその歴史を社会学的に解明しています。

それに対して同じアメリカ合衆国のプロテスタント史を対象としながらも，生きていたキリスト教の探求が『アメリカ合衆国における神の国』執筆の目的となっています。「第１章　形成的プロテスタンティズムの問題」で，ニーバーはヨーロッパのプロテスタンティズムによる宗教改革の検討から始めています。「第２章　神の主権」は合衆国が独立する以前のプロテスタント史の分析であり，およそ17・18世紀を検討対象としています。「第３章　キリストの御国」は大覚醒運動とリヴァイバルの中で次第に明確になる信仰内容を扱い，主として18世紀を検討対象としています。「第４章　到来する御国」は神の主権とキリストの御国に続く信仰内容を扱い，19世紀を検討対象としています。最後に「第５章　御国の制度化と世俗化」でニーバーは合衆国における神の国運動が制度化していく過程で生じた変化を分析しています。教派史研究にとって興味深い課題認識から『アメリカ合衆国における神の国』の叙述は始まっています。それは社会学的方法による教派史研究の限界克服の試みであり，具体的には合衆国プロテスタント史に内在していた力や教派教会を生みだしたキリスト教運動を問う認識です。

ニーバーによると『教派主義の社会的源泉』と『アメリカ合衆国における神の国』はトレルチの影響を強く受けています。ようやくそこから自立した作品が『キリストと文化』です。ニーバーは『キリストと文化』において宗教と文

化の関わりを５つの類型によって分析しています。

竹中正夫（1925～2006）はニーバーのもとで博士論文を仕上げ，生涯ニーバーに対する敬愛の念は変わりませんでした。ある時，ニーバーを訪ねた竹中は「日本に来て，ぜひ講演をお願いしたい」と依頼します。それに対するニーバーの答えは「竹中は私の研究内容を十分に理解している。だから，竹中が日本では私の研究内容を紹介してほしい」と竹中に期待する返事であったと聞いています。

竹中最後の著作『美と真実』にはサブタイトル「近代日本の美術とキリスト教」が付いています。近代日本のキリスト教と美術を結びつける発想は，トレルチ・ニーバーから竹中へと引き継がれたものです。だから，「敬愛するニーバーの弟子として，彼の研究を引き継ぎ日本で発展させる作品として，竹中は最後に本書を完成させた」と私は理解しています。すなわち，最も深く個体性概念を表現する一つとして美術作品はあります。だから美術作品と日本のキリスト教史を結びつけることにより，日本のキリスト教史はさらに深く共感されることとなるのです。

それではこれらの方法論はどのようにしてキリスト教史研究で生かされているのでしょうか。いくつかの作品で検証してみます。

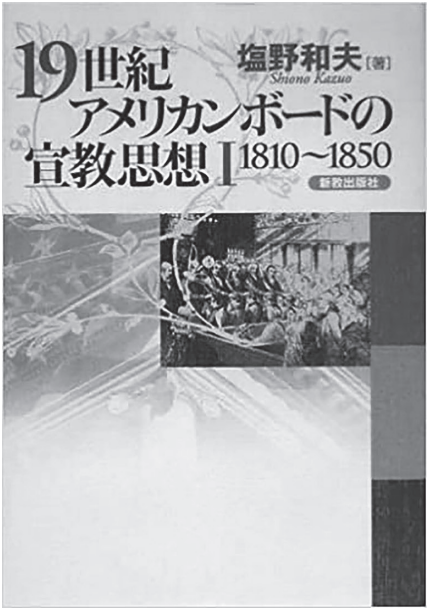
４　歴史を舞台とした４作品

(1) アメリカンボード研究の１成果

（資料⑯塩野和夫『19世紀アメリカンボードの宣教思想１　1810－1850』）

博士論文を完成させた1993年４月に西南学院大学へ就任しました。取り組み続けていたアメリカンボード研究の成果として『19世紀アメリカンボードの宣教思想１　1810－1850』を出版したのは2005年３月です。

本書は「序　19世紀アメリカンボード宣教思想研究の課題」で全般的な研究課題を明らかにしています。その上で「第１章　アメリカンボードをめぐる状況」と「第２章　アメリカンボード本部の宣教方針」において，1810－1850年



塩野和夫『19世紀アメリカンボードの宣教思想１　1810－1850』

当時のアメリカンボードの全体像を扱っています。要するに総体に対する研究です。

それに対して「第３章　宣教師の思想と行動」では各地域で活動した宣教師を取り上げ考察します。すなわち，ボンベイミッションのホール，チェロッキーミッションのウースター，西トルコミッションのグッデル，広東ミッションのパーカーです。牧師経験があり教会史研究にも取り組んできた著者が深い共感を込めてこれら４人の研究に取り組んだことは言うまでもありません。４人の研究によって宣教現場は生きいきと描かれています。つまり，彼らは個体性概念を担っているのです。

したがって，本書は「第１章」と「第２章」における総体概念と「第３章」の個体性概念の研究によって構成されています。なお，両者をつなぐ存在として「第２章　３　ウースターの宣教思想」が位置づけられます。ウースターは

アメリカンボードの設立に関わり，初代の通信幹事として宣教現場と本部をつなぐ活動に10年以上関わっていました。

(2) 歴史的出来事の当事者が語る歴史書

（資料⑰塩野和夫『禁教国日本の報道 ―『ヘラルド』誌（1825年－1873年）より ―』）

アメリカンボードを研究するための基礎資料の一つが『ヘラルド』誌です。筆者はボストン留学中にそのすべてをコピーして日本に持ち帰り，いくつもの観点から『ヘラルド』誌を読み，翻訳を進めていました。

その一つに日本関連記事の翻訳があり，『禁教国日本の報道』には57の記事が収録されています。最初の日本関連記事である「記事１　カトリック教会の日本宣教」（1825年４月号）から，高札撤去を報じる「記事57　最近の日本における革命」（1873年５月号）までです。それらを３部に分けました。次の通りです。

第１部　日米修好通商条約調印までの報告記事（記事１－記事９）
第２部　アメリカンボードの日本宣教決定までの報告記事
（記事10－記事28）
第３部　高札撤去までの報告記事（記事29－記事57）

併せてそれぞれの記事に解説を付け，それらも記事に従って３部に分けました。したがって，本書は『ヘラルド』誌の翻訳と解説から構成されていて，翻訳者の意図的作業が入ることはほとんどできません。ところが，内容を見ると歴史的に極めて興味深くなっているのです。

たとえば，「記事６　パーカー氏の日本航海日誌」（1838年６月号）です。日本を目指したモリソン号が1837年７月２日にマカオを出航し，目的を果たすことができずに同年８月29日にマカオへ帰還したことはよく知られています。記事はモリソン号に乗船していたパーカーによる報告であり，折々の情景と乗船

塩野和夫『禁教国日本の報道 ―『ヘラルド』誌（1825年－1873年）より ―』

者ならではの気持が生きいきと描かれています。同様に「記事８　函館描写」（1855年３月号）は提督ペリーの通訳として来日し，1854年５月17日から６月３日にかけて函館を調査したウイリアムズによって当時の函館の町の様子が報告されています。

パーカーによるモリソン号の報告にしても，ウイリアムズによる函館の報告にしても，歴史的出来事がその時の当事者によって伝えられている所に特色があります。したがって，記事の内容は当事者にしか分からない具体的な詳細さを持っています。歴史的状況を総体とするならば，彼らの存在は歴史的個体に違いありません。同じような存在が57の記事から何人も見出すことができます。

したがって，本書は歴史的出来事の当事者が語りかけている歴史書と言えるのです。

(3) 地域社会とキリスト教

（資料⑱塩野和夫『近代化する九州を生きたキリスト教 ― 熊本・宮崎・松山・福岡』）

アメリカンボード日本ミッションの年次報告書を基本史料として本書は書かれています。

全体像を対象とする「第１章　九州と四国におけるアメリカンボード記憶集団の特質」が興味深いです。記憶集団とは何なのでしょうか。歴史的出来事を記憶し伝えていくことによって，集団においては歴史的出来事が今も現在化されています。それは九州においては主として教会であり，四国ではキリスト教系学校なのです。

本論である「第２章　熊本ステーション関連記事（1888－1898年）」，「第３章　宮崎ステーション関連記事（1896－1900年）」，「第４章　松山ステーショ

塩野和夫『近代化する九州を生きたキリスト教 ― 熊本・宮崎・松山・福岡』

ン関連記事（1890－1900年）」はいずれも記事の翻訳と解説から構成されていて，やはり翻訳者の意図的な作業を持ち込むことができません。しかし，記事が扱っている対象は主として宣教師と日本人協力者の活動と問題，それに伴う喜びと苦悩です。したがって，記事自体に物語性があり，しかも熊本・宮崎・松山とそれぞれの地域によって事情は異なっています。

そこで，総論としての性格を持つ「第１章」に対して，「第２章」・「第３章」・「第４章」は各地域における個体性としての性格を有しています。なお，筆者にとって熊本・宮崎・松山はしばしば訪れていた親しみのある地域で，ある程度の土地勘もあります。したがって，記事に描かれている地域を思い浮かべ共感性を持って作業を進めることができたのです。

(4) 自分史の可能性

（資料⑲塩野和夫『うれしいやないか　シオノ!! ― 心の世界を描く ―』）

あしかけ10年の月日をかけて，『キリスト教教育と私　前篇』，『キリスト教教育と私　中篇』，『キリスト教教育と私　後篇』を書き上げ出版したのは2018年３月でした。その時，リハビリ仲間の一人から「生活している施設で，スケッチを見せながら説明すると，みんな食い入るように聞いてくれる」と報告を受け，続けて「スケッチを中心として，それに解説を加えた絵本にまとめてはどうか」と勧めを受けたのです。彼は元々東京で教育関係の出版社に勤めていたと聞いています。

半信半疑で出版社に相談したところ，出版社も積極的で「スケッチ・関連する本文・スケッチの説明文」を１セットとして，72セットの絵本にしてはどうかと話はまとまったのです。構成は次の通りです。

第１話　家族の物語
第２話　仲間，いろいろ
第３話　垣間見た人生
第４話　信仰，あれやこれや

塩野和夫『うれしいやないか　シオノ !! ― 心の世界を描く ―』

第５話　教育の物語
第６話　志に導かれて

スケッチはいずれも心を動かされた場面を描いていて，その意味で感動させられた人が中心となっています。だから，主たる対象は折々に出会った人々です。けれども，全体として見ると様々な出会いを通して成長した著者の半生となっています。

したがって，この絵本が様々な人々との関わりの中で生きた人物を描くことによって，ある時代の個体性を扱っていることは間違いありません。しかし，このような自分史が歴史書に値するのかどうかは本人ではなく，後世の判断に委ねられているでしょう。

おわりに

歴史にはさまざまな方法論があります。

しかし，「はじめに」で触れた通り，私たちは歴史性を刻印された歴史的存在です。だから，私たちにとって意味ある歴史的作品とは共感性を通して追体験でき，また心を揺さぶり動かされる作品に違いありません。

同じことが対象や方法論にも言うことができます。歴史が扱う対象は多くあります。その中でどのような歴史的対象と取り組むのでしょうか。共感性を通じて追体験できる対象こそ研究するにふさわしいと考えます。

方法論も多くあり，しかも対象によって変化します。その時にどのような方法論を採用するのでしょうか。方法においても対象との共感性を促進するものが相応しいと考えるのです。

資 料 編

資料①「聖書との出会い ― 苦悩の道を辿る」塩野和夫『キリストにある真実を求めて』41－140頁

序　　問題の所在

第１節　「個人の嘆きの歌」研究史

第２節　詩篇第42－43篇の分析的考察

第３節　詩篇第42－43篇伝承史の考察

第４節　神学的考察

資料②『日本キリスト教団　伊予吉田教会90年史』

第１章　福音伝道草創の頃

第２章　吉田講義所の設立

第３章　伝道の展開

第４章　福音の灯を守って

第５章　再生と挫折

第６章　すこやかな歩みを

資料③『宇和島信愛教会百年史』

第１部　伝道の情熱に生きた先達たち

第１章　宇和島伝道草創の頃

第２章　宇和島組合教会設立

第３章　近接地伝道をめぐって

第２部　揺るがぬ教会を

第１章　教会の自給独立

第２章　会堂の建設

第３章　町に立つ教会

第３部　教会を守る

第１章　苦悩の時代に

第２章　教会を守る

第４部　戦後の教会

第１章　教会の再生

第２章　鈴木・越智牧師時代

第３章　栗原・塩野牧師時代

資料・統計

資料④「日本キリスト教史の方法論」土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史論』11－47頁

第１章　日本キリスト教史の課題

第２章　各個教会史編纂の方法について

第３章　各個教会史の研究方法をめぐって

資料⑤「第１部　日本組合基督教会史の研究史」塩野和夫『日本組合基督教会史研究序説』９－117頁

第１章　組合教会の教会史編纂事業の研究

第２章　湯浅与三『基督にある自由を求めて』の研究

第３章　組合教会史研究の端緒

第４章　組合教会史研究の現況

資料⑥「湯浅与三史料 ― 日本組合基督教会史関連資料」塩野和夫『日本組合基督教会史研究序説』資料６－13頁

(1)（2）（3）（4）（5）（6）（7）（8）（9）（10）（11）（12）（13）（14）（15）（16）（17）（18）（19）（20）（21）（22）（23）（24）

資料⑦「第３部　日本組合基督教会教会法の研究」塩野和夫『日本組合基督教会史研究序説』189－294頁

第１章　研究方法の考察と教会法の分類

第２章　組合教会教会法の資料批評

第３章　組合教会教会法推移の研究

第４章　教会法における諸問題

資料⑧「第４部　日本組合基督教会統計の研究」塩野和夫『日本組合基督教会史研究序説』295－398頁

第１章　教会数の推移をめぐって

第２章　会員数と教師数の推移をめぐって

第３章　財産総額と教会常費の推移をめぐって

資料⑨「結章　日本組合基督教会史の時期区分」塩野和夫『日本組合基督教会史研究序説』399－416頁

１　出来事史と時期区分

２　組合教会史時期区分の設定

３　組合教会史各時期の概観

資料⑩「日本組合基督教会の歴史的４類型」キリスト教史学会『キリスト教史学』第50集，39－55頁

はじめに

１　組合教会の第１の教会類型

２　組合教会の第２の教会類型

３　組合教会の第３の教会類型

４　組合教会の第４の教会類型

結び

資料⑪大林浩『トレルチと現代神学』

序　論　問題提起と研究方法

第１章　トレルチの思想的背景

第２章　トレルチにおける宗教史学的神学

第３章　トレルチの宗教哲学

第４章　トレルチの歴史哲学

結　語

資料⑫「基本的方法としての歴史的思惟 ― エルンスト・トレルチの歴史的思惟を手掛かりとして」塩野和夫『日本組合基督教会史研究序説』123－149頁

第１節　トレルチ初期の歴史的思惟 ― 歴史的思惟とリチュル的なもの

第２節　トレルチ中期の歴史的思惟 ― 歴史的思惟とキリスト教史

第３節　トレルチ後期の歴史的思惟 ― 歴史的思惟と激動する時代

第４節　歴史的思惟と組合教会史研究

資料⑬「歴史的認識と共同体概念 ― エルンスト・トレルチの共同体諸概念を手掛かりとして」塩野和夫『日本組合基督教会史研究序説』150－171頁

第１節　キリスト教会の認識と共同体諸概念 ―『社会教説』の場合

第２節　歴史の認識と共同体諸概念 ―『歴史主義とその諸問題』の場合

第３節　共同体の歴史的認識と組合教会史研究

資料⑭「教派史研究の課題 ― ヘルムート・リチャード・ニーバーの教派史研究を手掛かりとして」塩野和夫『日本組合基督教会史研究序説』170－188頁

第１節　社会の分裂と教派の成立－『教派主義の社会的源泉』の場合

第２節　生きていたキリスト教の研究－『アメリカ合衆国における神の国』の場合

第３節　教派史研究と組合教会史研究

資料⑮竹中正夫『美と真実 ― 近代日本の美術とキリスト教』

第１章　黎明期の人びと
第２章　道ひとすじ
第３章　生命の芸術
第４章　生命の無限感
第５章　写実の道
第６章　精神の造形
第７章　聖なるものへの讃美
第８章　戦争を経験して
第９章　キリスト教との出会い
第10章　内村鑑三の弟子たち
第11章　像を彫る
第12章　遍歴の旅人
第13章　土の器
第14章　女性作家たち
第15章　死して生きる

資料⑯塩野和夫『19世紀アメリカンボードの宣教思想１　1810－1850』

序　　19世紀アメリカンボード宣教思想研究の課題
第１章　アメリカンボードをめぐる状況
第２章　アメリカンボード本部の宣教方針
第３章　宣教師の思想と行動
結　章　19世紀前期アメリカンボードの宣教思想

資料⑰塩野和夫『禁教国日本の報道 ―『ヘラルド』誌（1825年－1873年）より ―』

第１部　日米修好通商条約調印までの報告記事
第２部　アメリカンボードの日本宣教会決定までの報告記事
第３部　高札撤去までの報告記事

資料⑱塩野和夫『近代化する九州を生きたキリスト教 ― 熊本・宮崎・松山・福岡』

序　章　「奉教趣意書」に読む熊本バンド

第１章　九州と四国におけるアメリカンボード記憶集団の特質

第２章　熊本ステーション関連記事（1888－1898年）

第３章　宮崎ステーション関連記事（1896－1900年）

第４章　松山ステーション関連記事（1890－1900年）

第５章　近代化する福岡市におけるキリスト教

資料⑲塩野和夫『うれしいやないか　シオノ !! ― 心の世界を描く ―』

第１話　家族の物語

第２話　仲間，いろいろ

第３話　垣間見た人生

第４話　信仰，あれやこれや

第５話　教育の物語

第６話　志に導かれて